様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　３月３１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520361
研究課題名（和文）削除構文の獲得における日英語比較研究：日英文法の第一言語獲得の理論的・実証的研究
研究課題名（英文）A study of Japanese and English on the acquisition of ellipsis constructions

研究代表者
木口　寛久（KIGUCHI HIROHISA）
宮城学院女子大学　学芸学部・准教授
研究者番号：40367454

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語を母国語とする幼児は大人と同様に文中の省略部分を理解することが可能かをいくつかの省略を含む構文を対象に調査した。まず、それらの削除を含む構文の文法規則の理論分析を行った。その文法規則を幼児が獲得しているかを確かめるという観点から実証実験を行った結果、幼児は大人と同様の解釈をそれらの構文にあてはめているということが判明した。これは幼児が大人と同様の文法規則を既に保持している証拠の一端となりうるものである。

研究成果の概要（英文）：In this research, we investigated whether English children can understand the parts which are deleted in certain types of sentences as adults do. We first theorized these types of sentences. Then, in order to see whether the children possess the grammar that we theorized, we executed a series of behavioral experiments. Our experimental results suggest that the children have the same kind of the grammar that adults use for interpreting the deleted parts in these types of sentences. Thus, our research could provide a piece of the evidence that children have already acquired the same kind of grammar that adults have.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：言語獲得
科研費の分科・細目：言語学･言語学
キーワード：言語獲得、削除構文、日英対照言語学

１．研究開始当初の背景

削除構文は近年、理論言語学においても特に注目を集め、盛んに議論されている研究課題であり、その研究成果が理論言語学に大き

な発展をもたらしている。(Fiengo & May (1994)の VP-削除 (VP-Ellipsis)、Merchant (1999, 2001)の間接疑問文縮約(Sluicing)の研究など参照)。中でも、先行詞内削除構文 (Antecedent-contained deletion: ACD) は現在の文法理論研究で議論の的となっている構文の一つである (具体例：John kissed everybody that Bill did.)。それは、ACD が数量詞繰上げ (Quantifier Raising)と抽象的な意味部門（ＬＦ）の必要性を示す証拠の一つとなること、さらに、 ACD と代名詞がどの単語を先行詞に出来るかを規制する束縛原理の相互関与の研究において、Quanti-fier Raising の必要性だけでなく、束縛原理がＬＦのような抽象的なレベルで扱われなければならないことを示唆するからである (May (1985), Hornstein (1994, 1995), 特に Fiengo & May (1994) と Fox(1999, 2000)の ACD 構文における束縛原理の Bleeding/Feeding 現象を参照)。

木口（研究代表者）と Thornton（海外研究協力者）は、英語を母国語とする４歳台から５歳台の子供達の束縛原理 B,C に関わる ACD 構文に対する知識を評価すべく２つの実験を行なった(Kiguchi & Thornton 2002, 2004)。束縛原理Ｂ、Ｃとも代名詞が文中のどの名詞句を先行詞とできるかを規制する文法原理である。束縛原理Ｂは、主に一つの節の中の主語がその節の目的語の代名詞の先行詞になることを禁ずるものである。例えば John washed him.という節において目的語の him は主語 John を先行詞とできない。束縛原理Ｃは一般的な名辞が代名詞表現を先行詞とすることを禁ずるもので、例えば He washed John.という節において目的語の John は主語 he を先行詞にはできない。束縛原理Ｂ，Ｃで排除される名辞と代名詞の関係を含んだ ACD 構文を英語を母国語とする４－５歳児に判断させる実験を行った結果、子供達は代名詞を含む ACD 構文を大人同様に解釈できることが示された。これは４歳から５歳の子供達の用いている文法でも束縛原理が抽象的なレベルでの Bleeding/Feeding を受けていることを示唆しており、言語理論すなわち人間言語の生得的知識に関するモデルにＬＦのような抽象的なレベルが必要であることを示す実証的な証拠と言える。また、束縛原理 B は子供達が一般的な単文中で適用困難であることが知られている。この現象について Thornton & Wexler (1999)は、束縛原理 B の違反を許容するような強勢のある代名詞の発音を誤って一般の発話での代名詞にもあてがっている為、子供達が束縛原理 B をうまく適用できないという提案を行った。Kiguchi & Thornton(2002, 2004)では ACD 構文中の動詞句省略に含まれた発音されない代名詞について子供達が束縛原理 B を正しく適用できることが示されたが、この実験結果は Thornton & Wexler (1999)の提案と首尾一貫するものであり、束縛原理 B も原理的には４-５歳児の文法に内在するものであることを示唆する。更に、”*He1 jumped over every fence John1 tried to”のような主語位置に代名詞を、目的語内に名辞を置いた束縛原理Ｃで排除される ACD 構文を子供たちが束縛原理Ｃの Bleeding を起こさず適切に解釈したことは、Quantifier Raising は時制句でなく動詞句を到達点としているとする Johnson & Tomioka (1998)、Fox (2000)、Merchant (2000)の主張に言語獲得の観点から支持を与える。すなわち、Kiguchi & Thornton(2002, 2004)は、先端文法理論研究に基づいた第一言語獲得実験により(i)先端の文法理論の妥当性を行動実験により実証すると同時に、(ii)言語獲得理論に重要な洞察と知見を与えるという稀有な学術貢献を果たしたと思われる。

２．研究の目的

上記の研究代表者と海外共同研究者の研究成果を発展させ、句、節の省略、削除が関与する他の構文の調査も行い、それが言語獲得モデルにおいてどのような含意があるかを見極め、実験を行い、言語獲得・言語発達理論ひいては現在の文法理論に対して新たな知見を提供することが本研究の目的である。殊に、日本語の削除構文に関する研究も近年、興味深い統語分析が提案されつつあるが、英語における研究には遅れを取っていることは否めず、ひいては、それらの提案に対する実証的研究は殆ど見当たらない（数少ない例として Sugisaki (2006))。そこで、本研究では日本語の統語論分析を専門とする小泉と日本語の言語獲得理論を専門とする遊佐を研究分担者に加え、削除構文における日英文法の第一言語獲得のプロセスを比較し、言語の多様性、及び普遍性についての実証的・理論的解明を目指す。具体的には、以下の研究課題について、研究代表者と研究分担者が英語の削除構文に対応する日本語の構文の調査を行い、海外研究協力者と並行実験を行う。 (i) Pseudo-cleft と束縛原理の相関 (ii) Fragments の理論的・実証的研究 (iii)主語位置と目的語位置での N’-削除の性質の解明。である。

３．研究の方法

本研究では、日本語、英語の削除に関する構文を取り上げ、言語理論に密接に基づいた実証研究を実現する。日本語、英語の母国語話者に内在する文法のモデルを理論的に構築し、モデルの妥当性を確認する実験を積み重ねることで日本語、英語母国語話者の言語知識とその獲得過程の解明に寄与する。この目的達成のために、まず日本語、英語の削除に関する構文の中でも Pseudo-cleft 、Fragment、N’-削除についての理論的考察を進めつつ、これらの理論についての実証的研究も同時に計画し、実施した。

４．研究成果

本研究では、日本語、英語の削除に関する構文を取り上げ、言語理論に密接に基づいた実証研究を実現する。日本語、英語の母国語話者に内在する文法のモデルを理論的に構築し、モデルの妥当性を確認する実験を積み重ねることで日本語、英語母国語話者の言語知識とその獲得過程の解明に寄与する。具体的には句、節の省略、削除が関与する他の構文の調査も行い、それが言語獲得モデルにおいてどのような含意があるかを見極め、実験を行い、言語獲得・言語発達理論ひいては現在の文法理論に対して新たな知見を提供することが本研究の狙いであった。

初年度である平成１９年度は、まず海外研究協力者 Thornton が既に採集に着手していた Fragments の２歳から４歳の英語母国語話者の発話データの研究結果報告（GALA2007）について、本研究の初期実験データとして分析した。英語の母国語話者が発声しない類の２歳児の発話が日本語の文法では適切な発話であるなど興味深い点が見られた。また、今後のデータ収集分析においての着目点についても討論を重ねた。また英語を母国語としない英語話者に良く観察されるＢＥ動詞の過剰生成現象が、実は現行の言語理論の枠組みを支持するという分析も進めた。（雑誌論文④）

平成２０年度は、英語と日本語の Pseudo-clefts と束縛原理の相関について、理論的研究と実証的研究に着手した。まず日本語における理論的研究を行ない、日本語の Pseudo-clefts も移動による派生として分析されると主張する研究を論文にまとめた（雑誌論文②）。Kuroda (1999) や Hiraiwa&Ishihara(2001)などで、日本語の clefts 構文は移動によって生成されるが、Pseudo-clefts は島の制約を受けないことから、それらは移動によって生成されたのではなく基底生成された構文であると分析されてきた。しかし、この論文では再構築現象の観点から Pseudo-clefts も移動によって生成されるべきであると主張した。また島の制約を受けない日本語の Pseudo-clefts の特徴は Boeckx(2003)の主張する島の制約の分析に従うことで解決できると提案した。さらに英語における実証的研究においては、海外研究協力者 Thornton を交えて実験計画の検討を重ね、Pseudo-clefts と束縛原理の相関に関する複数の実験に着手した。また、名詞句内でも指定部と主要部に一致現象が見受けられる場合にのみ削除が認可されるとする Lobeck(1995)や Saito&Murasugi(1990)の主張を鑑み、今回の研究プロジェクトでの萌芽研究の一環として日本語における名詞句内の指定部と主要部の意味的な一致現象における脳内処理の実証的研究結果を論文にまとめた。（雑誌論文③）そこでは、名詞句内の属格数量詞とそれが修飾する名詞との意味的統合が刺激の呈示から約２５０ｍｓで脳内処理が行われていると結論付けられる心理行動実験と MEG を用いた脳機能計測実験の分析を報告した。

平成２１年度は、英語における理論的研究では英語の pseudo-clefts で語順倒置が起こっている構文(inverted specificational pseudo-clefts)の構造分析を行なった。Bachrach(2003) の specificational pseudo-clefts の分析をさらに推し進め、英語の inverted specificational pseudo-clefts も、Bachrach(2003)がヘブライ語およびフランス語に対し提案した再構築現象と削除が協働した分析が適用可能であると主張した（研究論文①）。さらに英語における実証的研究において、海外共同研究者 Thornton により uninverted specificational pseudo-clefts および inverted specificational pseudo-clefts と束縛原理の相関に関する複数の第一言語獲得実験が実施され、本研究での理論的研究の実証的研究がなされた。そして、これらの研究成果は日本言語学会 139 回大会ワークショップ：On interaction between syntactic and semantic interpretations in child grammar で発表された。また本研究でなされた理論的研究は Rizzi(1997)が提唱した補文標識句（CP）の内部構造を援用している。本研究での理論的研究が実証的実験により支持されたことは、英語を母国語とする幼児の文法理論において、Rizzi(1997)が提唱する豊かな補文標識句（CP）構造が必要であることを示唆すると思われる。さらに、この実証的研究

の結果は英語を母国語とする幼児の文法が早期においても、語順倒置および、cleft を基底とする構文を解釈できるほど豊かであることを示唆する。これは、主語と述語の語順が入れ替わった構文やcleftを幼児が理解することは出来ないとするHirsch&Wexler(2007)による知見とは対照的であると言える。現在、海外研究者Thorntonと共にこれらの研究成果をまとめた論文を執筆中であり、それを国際有力研究雑誌に投稿する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

① Hirohisa Kiguchi、On inverted pseudo-clefts、宮城学院女子大学英文学会誌、査読無、2010、pp. 59-81、
② Hirohisa Kiguchi、A note on pseudo-clefts in Japanese、宮城学院女子大学英文学会誌、査読無、2009、pp. 51-75、
③ Hirohisa Kiguchi、 Nobuhiko Asakura、An MEG study of temporal characteristics of semantic integration in Japanese noun phrases、IEICE Transactions on Information and Systems、査読有、2008、pp.1656-1663
④ 遊佐典昭、*He is often play tennisに見られるBE動詞の過剰生成、言語研究の現在―形式と意味のインターフェイス、開拓社、査読有、2008、pp. 471-481、

〔学会発表〕（計　１件）

① Hirohisa Kiguchi、A truncated cleft analysis on inverted pseudoclefts in English、日本言語学会１３９回大会ワークショップ、神戸大学、２００９年１１月２９日

６．研究組織
(1)研究代表者
木口　寛久（KIGUCHI HIROHISA）
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：40367454

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
遊佐　典昭（YUSA NORIAKI）
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：40182670

小泉　政利（KOIZUMI　MASATOSHI）
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10275597